

# 横浜市インフルエンザ流行情報 7 号

横浜市健康福祉局健康安全課 / 横浜市衛生研究所

## 《トピックス》

### インフルエンザ流行注意報が発令されています。

#### 【概況】

2016 年第 52 週(2016 年 12 月 26 日～2017 年 1 月 1 日)の定点<sup>※1</sup>あたりの患者報告数は、横浜市全体で **10.87** と、前週 13.77<sup>※2</sup> よりやや減少しています(原因については本文 1 参照)。報告された患者の半数以上は 15 歳未満です。また、入院が必要となる**重症化事例**が、同時期に流行入りした 2014/15 シーズンより多く報告されており(本文 4 参照)、注意が必要です。

第 52 週の迅速診断キットの結果は **A 型 90.8%**、**B 型 8.1%**、**A・B 型ともに陽性 1.1%**となっています。市内のウイルス検出状況では、ほとんどが **AH3 型(A 香港型)**です。

第 52 週は冬休みのため学級閉鎖の報告はありませんが、**医療機関、高齢者施設内での集団発生**の報告もあり、手洗い、マスク着用の徹底といった施設内感染予防策や面会者等による外部からの持込みについても注意が必要です。

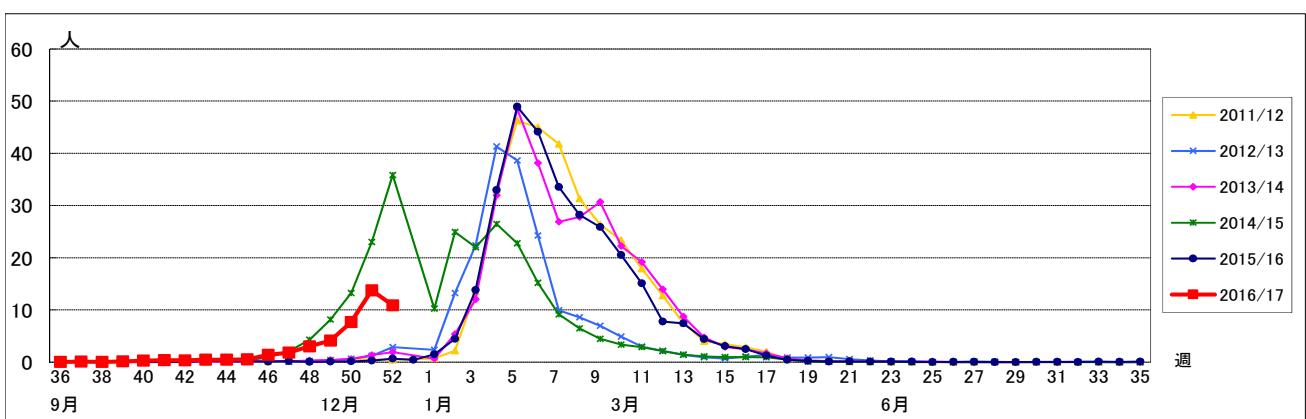
新学期も始まり、今後インフルエンザの更なる流行が予想されるため、予防や早期受診などの対策<sup>※3</sup>の重要性を踏まえて、充分にご注意ください。

※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内 153 か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

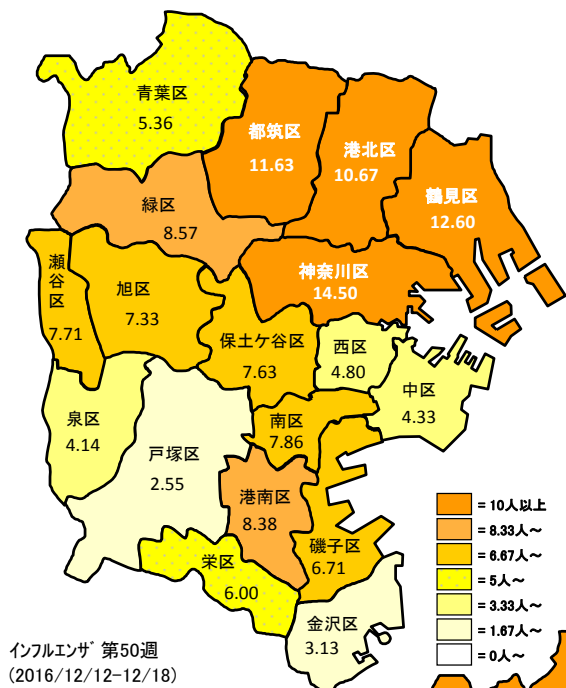
※2 追加報告があったため、流行情報 6 号から報告数が更新されています。

※3 [インフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

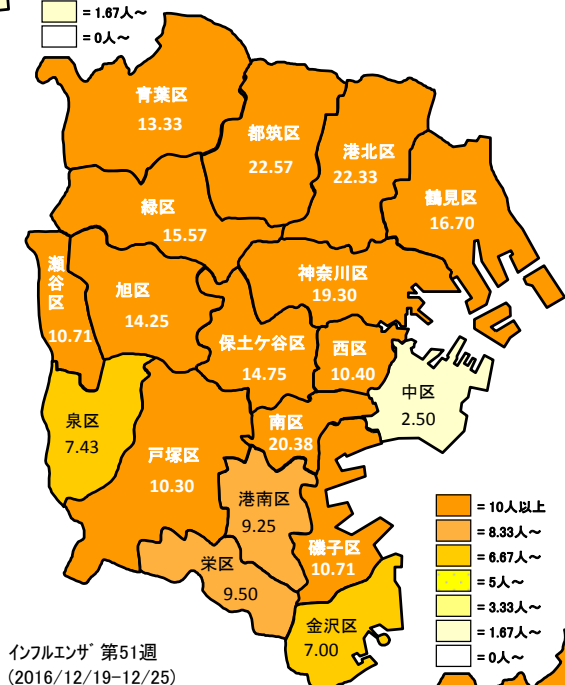
**1 市内流行状況:**市全体の定点あたりの患者報告数は、2016 年第 52 週で 10.87 と、注意報発令基準値(10.00)を上回った前週 13.77 よりやや減少しています。これは年末年始にて定点医療機関が休診中のことが多いため、流行の実態を正確に反映していないことが考えられますが、注意報レベルは上回っています。



## 2 地図で表した直近 3 週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)



市全体にて定点あたり10.00人以上で注意報発令、30.00人以上で警報発令となります。  
現在、警報発令基準値を上回っている区はありませんが、都筑区、港北区、南区では第51週で既に20.00を上回っています。



地図で表した直近 3 週間の  
区別流行状況  
(塗り分けの数字は  
定点あたり報告数)

### 【参考リンク】

近隣自治体の流行状況

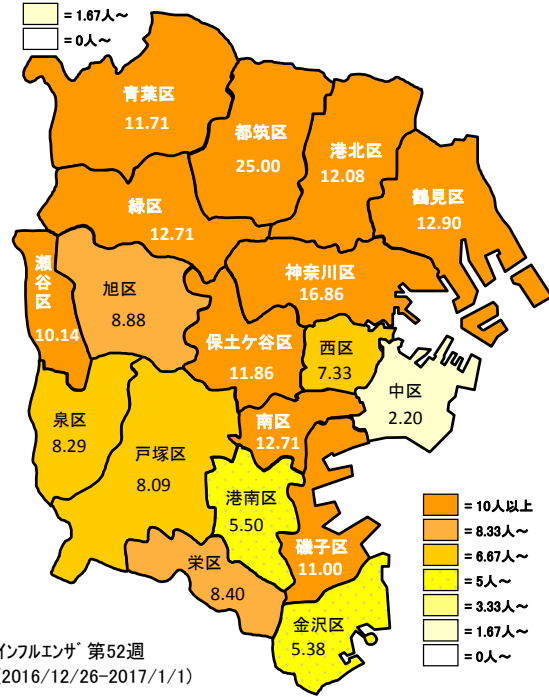
○ [神奈川県](#)

○ [川崎市](#)

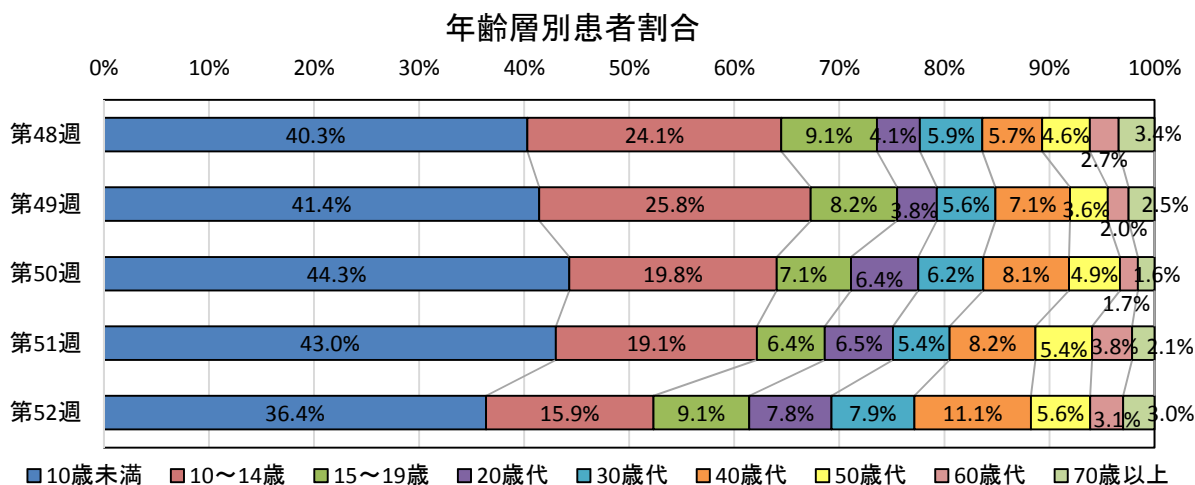
○ [東京都](#)

全国の流行状況

○ [国立感染症研究所](#)



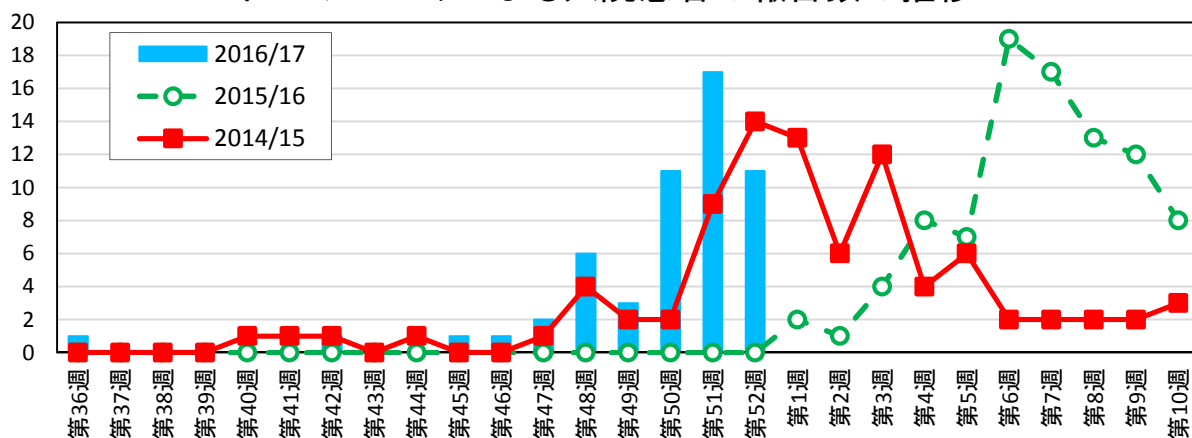
**3 年齢層別集計:**第 52 週の患者年齢構成は、10 歳未満が全体の 36.4%、10 歳以上 15 歳未満が 15.9%となっており、15 歳未満が半数以上を占めています。これから新学期が始まることもあり、小学校や中学校での感染予防策の徹底が重要です。



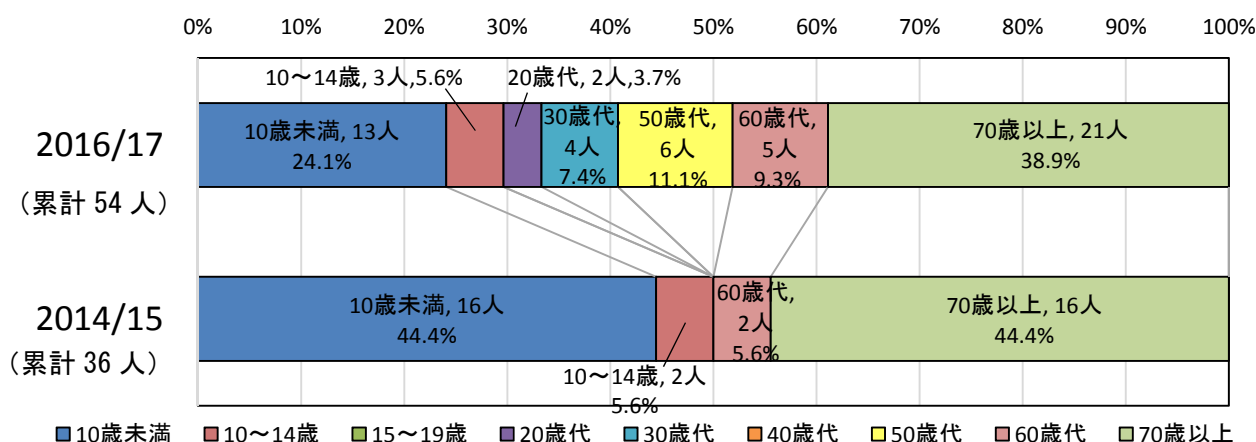
**4 入院サーベイランス:**市内基幹定点医療機関<sup>※4</sup>におけるインフルエンザ入院患者は増加しており、第 52 週までの累計で 54 人となりました。うち、15 歳未満が 16 人、70 歳以上が 21 人となっており、小児と高齢者が多くを占めています。

今シーズンと同時期に流行入り、および注意報発令された 2014/15 シーズンでは、第 52 週時点での累計入院患者は 36 人であり、今シーズンは 2014/15 シーズンより 1.5 倍程度多く報告されています。年齢層で比較してみると、今シーズンは 20 歳代から 60 歳代の報告が増えており、小児・高齢者に限らず全世代で注意が必要です。

(人) インフルエンザによる入院患者の報告数の推移



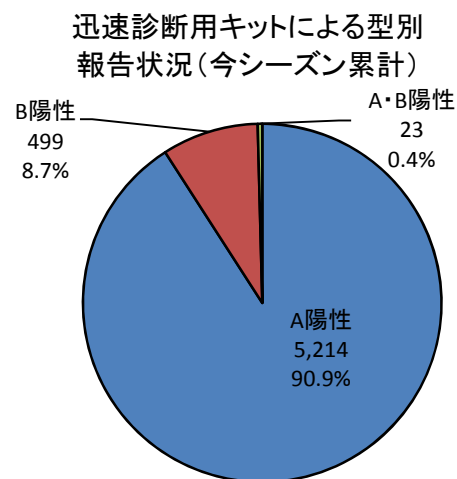
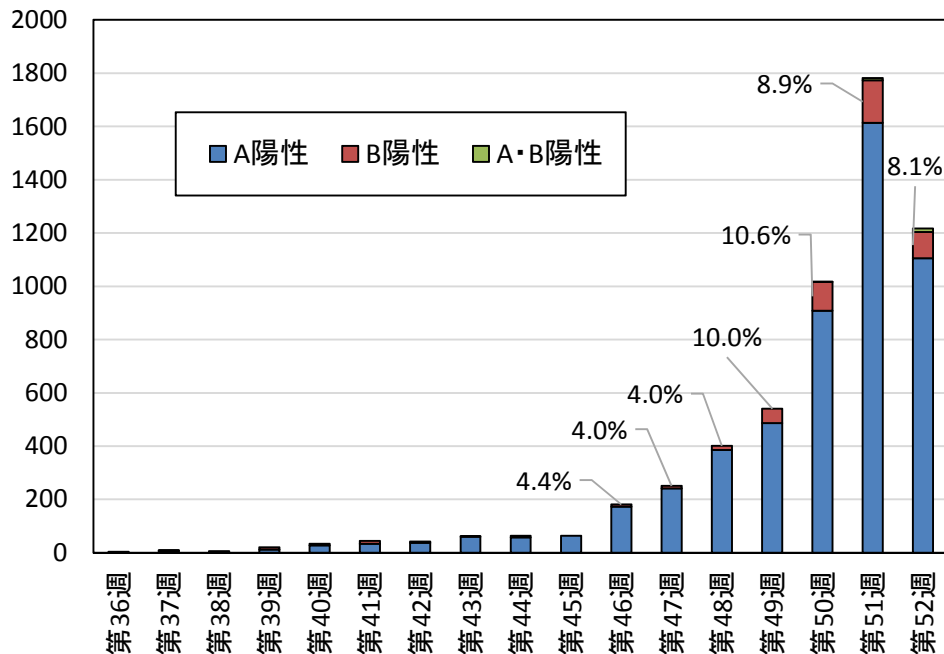
第52週時点における累計入院患者数(年齢層別)の比較



5 市内学級閉鎖等状況:第52週は冬休みのため、学級閉鎖等の報告はありませんでした。6号から追加等による変更はありません。

6 迅速キット結果:今シーズンの迅速キットの結果の累計は、A型90.9%、B型8.7%、A・B型ともに陽性0.4%で、A型が多く検出されています。第52週の結果はA型1,105人(90.8%)、B型99人(8.1%)、A・B型ともに陽性13人(1.1%)で、第48週以前と比べてB型の割合がやや増えています。

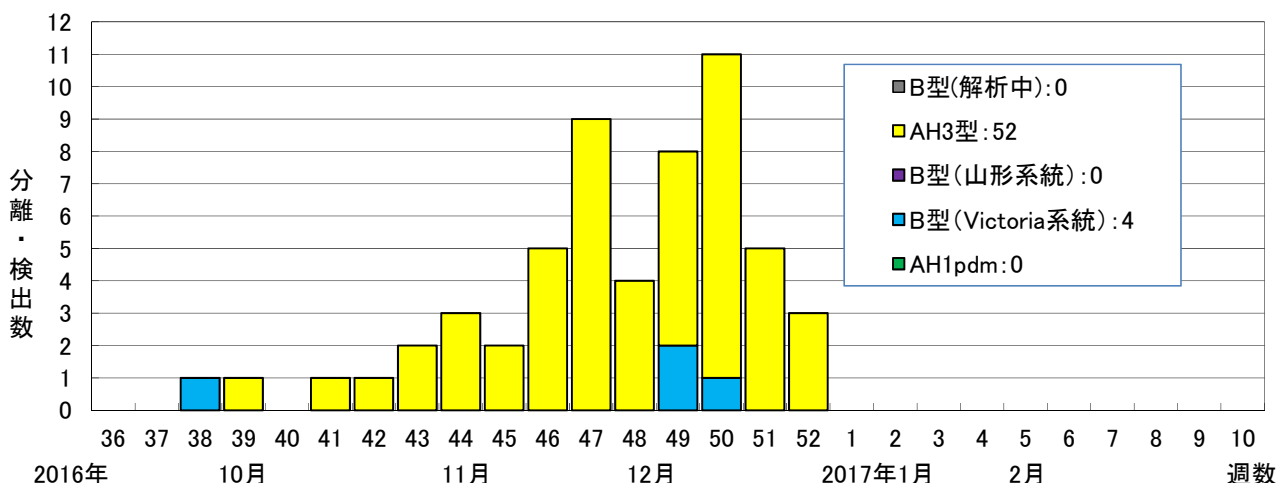
横浜市の患者定点医療機関における  
迅速診断用キットによる型別の報告数(人)



7 市内病原体検出状況:市内では病原体定点から AH3 型が最も多く分離・検出されており、全国状況<sup>※5</sup>と同様です。

※5 [インフルエンザウイルス分離・検出速報\(国立感染症研究所\)](#)

病原体定点からのインフルエンザ分離・検出状況(2016年12月28日現在)



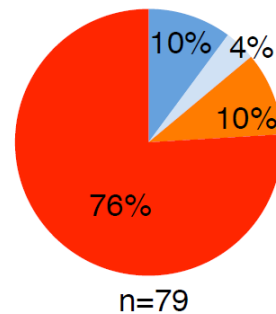
8 抗原性解析状況:国立感染症研究所が2016年12月28日に公表した解析結果<sup>※6</sup>によると、今シーズン(2016年9月～)に流行しているAH3型の分離株の8割以上でワクチン株に対する反応性の低下が認められ、流行しているAH3型株とワクチン抗原の抗原性の相違が推定されています<sup>※7</sup>。

※6 [インフルエンザウイルス流行株抗原性解析と遺伝子系統樹 2016年12月28日\(国立感染症研究所\)](#)  
 ※7 [A\(H3N2\)亜型野外流行株の抗原性解析結果\(国立感染症研究所\)](#)

### A(H3N2)亜型野外流行株の抗原性解析結果

(国立感染症研究所ホームページ<sup>※7</sup>より抜粋)

抗A/香港/4801/2014(X-263)ワクチン製造株 血清  
(2016年9月-現在)



ホモ中和価から ■: 2倍以内 ■: 4倍 ■: 8倍 ■: 16倍以上の反応性低下 ※8

※8 ワクチン類似とされているのは4倍以内です。

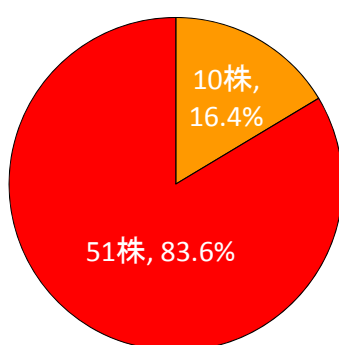
#### 【参考】

市内で分離されたAH3株(細胞培養した61株)のワクチン株との抗原性解析(HI試験)は、ウサギの血清を使っているため参考値ですが、すべて8倍以上でした。現在までに市内で分離されたAH3株については、ワクチン株と類似しているとは言えず、国立感染症研究所の結果と矛盾しない結果と考えられます。

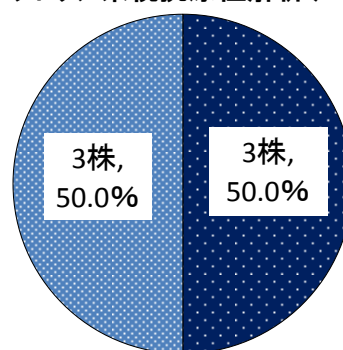
一方、市内で分離されたB型株(細胞培養した10株)については、すべて4倍以内でした。

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析(2016年12月28日現在)

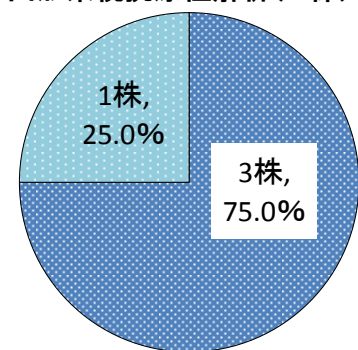
AH3 抗原性解析(61株)



Bビクトリア系統抗原性解析(6株)



B山形系統抗原性解析(4株)



■ 同等 ■ 2倍 ■ 4倍 ■ 8倍 ■ 16倍以上 ※8

※8 ワクチン類似とされているのは4倍以内です。